

米 土門



土門 剛 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

北海道産米の値崩れが激しい。相場より割高の概算金で集荷したことが原因だ。自宅近辺のスーパーなどを調べたところ、いずれも生産者概算金を割り込むような値段で売られていた。いずれも「ななつぼし」5kg入り税込み価格である。調査は2月23日から25日の3日間。

▽コストコ＝1898円（札幌・松原米穀扱い）▽西友＝1898円（神明扱い）▽イオン＝1922円（PB商品・とまこまい広域農協指定）▽イトーヨーカ堂＝2036円（木徳神糧扱い、5・25kg 2138円を5kg入りに換算）北海道が誇るブランド米も形無し

の安売り乱売合戦の様子がくつきりと浮かび上がってくる。北海道の米関係者が絶句しそうなのは、最安レースのトップを走るコストコ価格に、ホクレン出荷・神明扱いの西友価格が同着になったことだろう。そして奇異に感じたのは、イオンのPB商品だ。価格表の横に「とまこまい広域農協指定」という説明があった。イオンと農協のコラボ商品のようなのである。農協も安売り競争を

仕入れ失敗を政府に転嫁する JA北海道中央会の裏工作

③令和2年産は、作況指数106が示すように豊作でした。にもかかわらず「ななつぼし」は前年産より300円安い1万3200円、

容認したのである。仕入れの失敗により供給過剰に陥っていることを示す格好のエピソードではないか。

道産米の乱売合戦が始まった

ななつぼしの直近の相対取引価格は、2020年12月時点の1万5081円（玄米60kg税込み）だった。収穫前に農協に提示したホクレンのJA概算金は1万3200円。その差1881円は、出荷・物流経費相当額なので、その販売価格ならホクレンにはほぼ利益は出ないとみた。北海道産米の直近在庫は38・3万t（20年12月末現在）。米産出高から推定するホクレンの取扱いシェアは77%（18年度）だ。商人系集荷商は収穫直後に売却するので、その数字の大半はほぼホクレンの在庫分と推定した。在庫分の行き先は大手卸。ホクレンとの間で事前契約・複数年契約を結んでいるからだ。大手卸は、高額概算金で仕入れに失敗したホクレンの抱きつき心中（安売り乱売）の相手をさせられている印象を受けてしまう。

これはまだ乱売合戦の前哨戦だ。本番は、3月。本誌が読者の手元に届く頃は、春の到来で気温が上昇、それに伴い常温倉庫から米が出ていくときだ。スーパー店頭で5kg税込み1500円を切るセールが始まった。もおかしくない状況。ホクレンにとって、いずれは赤字覚悟の在庫処理が待っている。

前月号特集で、農協組織が抱える大量の在庫をめぐり、JA全中が政府に緊急買い上げを要請している様子レポートした。主役は、ダントツの過剰在庫を抱える北海道農協組織に違いないと踏んだ。その事実をあまり出してみよう。

まずは当事者の取材から始めた。在庫を抱えているのはホクレンだが、オール北海道農協を代表してJA北海道中央会へ次の質問状を放ってみた。2月22日のことだった。

①昨春秋以降、道選出の国会議員を通じて、政府に対し、在庫米の政府買い上げの要請をしたことがありますか。

②もし、要請したということでしたら、その根拠となる理由を教えてください。

③令和2年産は、作況指数106が示すように豊作でした。にもかかわらず「ななつぼし」は前年産より300円安い1万3200円、

土門 辛聞

定時には、まだ北海道米をはじめ主要産地の新米は流通が始まっておらず、作況

「ゆめぴりか」は前年産と同額の1万4700円と強気の概算金を示されました。米のマンズリーレポートが示すように大量の道産米が売れ残っています。一部の量販店では、「ななつぼし」や「ゆめぴりか」の値下げ販売が起きています。これは相場より高めの概算金を示したことが原因したのではないのでしょうか。

ホクレンと北海道中央会からの回答

2月22日（月）夕方、ホクレン主食課から「質問状への回答は、休み明け（23日は天皇誕生日）にさせていただきます」と電話連絡が入った。ビジネス・ライクで丁寧な対応には恐れ入った。そして約束通り、24日午前に回答が届いた。

ホクレンは、質問③のみ回答、残る質問はJA北海道中央会名で返答させると伝えてきた。政策要請は、同中央会の役割となっているからだ。そして質問③の回答は次の通り。

「概算金については、令和2年8月27日に決定いたしました。概算金決

も北海道『やや良』全国的には平年作が見込まれる状況の中、生産者の生産意欲を損なわない最大限の概算金水準とした経過にあります。（弊会の北海道出荷開始は9月16日）概算金決定時には新潟県以外の主産県は概算金を決定しておらず、結果的として北海道の概算金は相対的に高い水準になったと認識しております。

令和2年産米の販売状況としては、（2021年）1月末現在の前年対比で「ゆめぴりか」108%、「ななつぼし」85%であり、「ゆめぴりか」は販売が好調に推移しております。

『ななつぼし』は概算金水準の影響もあり、結果として競合銘柄に販売で遅れをとっており、巻き返しを図るために、米穀卸と連携して生協・量販店にて個別にクローズドキャンペーンや増量セールを仕掛けるなどして特売企画への採用を推進しております」

概算金が高かったことを正直に認めたことは評価できる。それはそれとして、ホクレンともあろう組織が、なぜそのような概算金を出してきたのか。疑問は残る。

主要産地の20年産概算金は、8月29日にホクレンが公表する前に北陸4県と関東の一部産地の公表があった。ホクレンにとって最大のライバ

ルである全農にいがたは、同16日に標準的な「コシヒカリ一般」で1万4000円（玄米60kg）と、前年産より6%も下げた概算金を公表していた。しかもコロナによる消費停滞が色濃くなる中でのことだ。

2月25日、首都圏のスーパーで偶然見かけた「ななつぼし」（10kg 3974円）と「新潟コシヒカリ一般」（同4293円）の小売価格。扱いは米卸最大手の神明（神戸市）だ。その概算金（20年出回り当初1万3200円）から考えると、微妙なところで「ななつぼし」がやや割高という印象を受けてしまう。

相手の仕入れ値を見誤ったということになるのか。その差が在庫に跳ね返る。主食用収穫量が新潟より約5%少ない北海道が、在庫では逆に27%も多いという状況になっているのだ。

一方のJA北海道中央会からは、なしのつぶてだった。原稿の締切日が近づいてきたので、26日午前、電話で催促すると、なぜか「24日付け」と記載された回答書がファックスで送られてきた。当方のファックスには受信記録はない。回答書はその日付で作成していたようだが、何かのミスで送り忘れたか、すつとほけて送信をやめたかのいずれかだ。ホクレンの対応とは天地の差がある。

肝心の回答は、予想通り、木で鼻をくくったような内容だった。

①への回答

「令和2年度において要請は実施しました。我々の主張は、コロナ等の影響で急激に悪化した需給環境を正常化するために、手法は問わず緊急的な市場隔離が必要であると提案しましたが、北海道米を政府に買入してほしいと要請した経過はございません。なお、要請などを実施した時には、北海道米として過剰在庫は保有してはいませんでした」

②への回答

「現行の米政策において、過去2年間はたまたま不作等により米の過剰感はありませんでしたが、令和2年産においては、全国的な過剰作付けによって供給過剰が懸念されていたため、4月の段階からその問題点を農水省やJA全中等にお伝えしていただきました。加えて、コロナ影響による急激な需要減少が想定されましたので、全国における需給環境を通常な状態に保ち、生産者が米作りに夢と希望と意欲をもって努力できるような、一つの対策として提案を行った経緯にあります」

JA北海道中央会課長が漏らしたホンネ

否定の仕方が実に不自然だ。質問

①に対する、「北海道米を政府に買入してほしいと要請した経過はございません」と回答してきた点。あまりにも姑息すぎる言い訳だ。ファックスを読んで、すぐに電話をかけてJ A北海道中央会にねじ込むことにした。相手はホクレンご指名の米穀農産課の平野茂貴課長だ。いきなり猫パンチを放ってみた。

「それなら、自民党でこの問題を扱う農業基本政策検討委員長の小野寺五典先生が、系列紙の農業協同組合新聞（12月11日付け）で、政府に対し緊急買い上げを要請する農協組織を諷める発言をなぜしたのか。平野さんの言い分の通りなら、小野寺先生は、農協組織が要請もしていないのに、勝手にあんな発言をしたことになるよね。いま平野さんがお話しされた内容を小野寺先生に直接確かめてもよいかな」

それまで饒舌に喋っていた平野さん、なぜか急に黙り込んでしまった。北海道は全国最多の在庫を抱えている。緊急買い上げ問題は、即、北海道の問題でもある。さらに虚を衝く質問を放ってみた。

「J A北海道中央会は、北海道2区選出で元農林大臣の吉川貴盛さんに政府に買い上げを要請するよう依頼されましたか」

ビミョーな質問なので否定してく

るかと思っていたら、「吉川先生は、買い入れはできない派でしたし、当時も『できんぞ』と言われていました」と、あっさり白状。語るに落ちるとは、このことだ。買い上げの要請をしていたのだ。

平野さんの本音炸裂は、質問③で触れた概算金についての回答だ。この質問にはホクレンが回答することになっていたが、あえて平野さんにならなければならぬと思うか」と質問を振り向けたら、最初はホクレンと同じ内容の回答だった。そこでホクレン向けにと思っていた質問を放ってみた。

前振りとして平野さんに、冒頭で取り上げた首都圏での大手スーパーによる「ななつぼし」5kg入り税込み価格を読み上げておいた。その感想も含めてホクレンが提示した概算金の見解も質してみたところ、思わぬ答えが戻ってきた。

「残念ながら、あれは失敗だった」
今度はこっちが虚を衝かれてしまった。これについてのホクレンの正式見解は、概算金を公表した時点では豊作になるとの予想が立たず、「相対的に高い水準になった」という回答だった。

反省の意味が込められているように受けとれたが、平野さんはさらに踏み込んで失敗だったとはっきりと

認めてきた。そこで平野さんに、こう説明しておいた。

「ホクレンが抱える過剰在庫は、コロナによる消費減退の影響を受けたというよりは、高い概算金を出した結果、農協を通じてホクレンに米が集まりすぎたことが最大の原因ではないかな。平野さんは失敗だと認めているわけだから、ここはホクレンが仕入れ失敗の事実を素直に認めるべきだ。政治家を使って政府に緊急買い上げの要請などしてはいけなと思う。もちろん水面下の工作もダメだよ」

何回も念押しをしたら、最後には素直に「はい、分かりました」と返事をしながら、「ただし手法として、需給調整の正常化は求めていきませ」という条件を付けてきた。

これには、「需給調整の正常化は、あなた方の問題であって、政府に買い上げを要望するのは、お門違い。それは『平成30年産問題』（18年からの国による減反事務不関与）のときにJ A組織も受け入れたことではないか」と説教しておいた。

最後に、平野さんに「男と男の約束だよ。水面下の工作もダメ、ダメ。約束を違えたら……」と言ったところで、取材の電話が切れた。携帯の電波が途切れたのだ。時計をみたら、1時間も電話していた。

築き上げたブランドを自ら毀める行為

取材の中で平野さんからとても重要なことを教えてもらった。道産米の概算金決定メカニズムだ。初めて聞く話だった。ホクレンで米を担当するプロがマーケットと相場をみて金額を決定すると思っていたら、そうではなかったのだ。生産者代表も加わった委員会のような組織で決めるという説明だった。協同組合らしく生産者の意向を概算金に反映させようというのだが、ある意味でポピュリズム的な意思決定メカニズムでもある。

生産者は、米作りのプロであって、決して販売のプロではない。マーケットの動きをたえずフォローしているとも思えない。価格決定の重要な局面で生産者が関与すると、得てして相場に強気で立ち向かうことになる。20年産についても実際にそうだった。コロナ禍のさなか、消費動向が大きく揺れ動く中で強気に出たところ、それが裏目に出たものと思う。

それはさておき、北海道が誇るブランド米の「ななつぼし」と「ゆめぴりか」の概算金を時系列で整理しておいた（次ページ表）。ホクレン、J A、生産者の緊張関係が分かるよ

士門 辛聞

一定の影響力を与えることは、と
きとしてこのよ
うな間違いを犯
しがちになる。

うに、農水省の統計資料から生産者のJA利用率、JAのホクレン利用率を作成してみた。

とくに注目していただきたいのは、「新潟コシヒカリ一般」と競合する「ななつぼし」。概算金は15年産から5年連続で前年産を上回った。ところが、首都圏スーパーでの小売り価格は、さほどの差はない。相手が6%も下げてきたのだから、「ななつぼし」も対抗上、同率かそれ以下に下げおくべきだった。

生産者を加えた決定方式は、確かに「生産者の生産意欲を損なわない」という協同組合のスローガンに沿ったものだが、ときにマーケットのことが脇に追いやられることがある。生産者代表の理事に、販売のプロが遠慮してしまう局面だ。どうやら昨年産の概算金は、協同組織の悪い面が出たように思えてならない。

餅屋は餅屋という考え方がある。それに従えば、生産者が為すべきことは、マーケットが示す価格に沿うべく、コストを下げ、品質を向上させる努力を続けることである。生産者が加わり、なおかつ価格決定に一

■北海道の米販売における農協のシェア

	北海道		農協		ホクレン		概算金 (出回り当初)		相対取引価格 (通年平均)	
	産出高 千t	取扱高 千t	シェア %	取扱高 千t	シェア %	ゆめ びりか	ななつ ぼし	ゆめ びりか	ななつ ぼし	
2020						14,700	13,200	16,990	15,081	
2019						14,700	13,500	16,800	15,869	
2018	1,122	1,035	92	865	84	14,500	13,400	16,266	15,996	
2017	1,279	1,157	90	961	83	14,500	13,200	17,226	15,882	
2016	1,167	1,058	91	891	84	13,500	12,000	16,479	14,244	
2015	1,149	1,090	95	876	80	13,000	10,800	16,209	13,117	
2014	1,105	1,031	93	734	71	12,000	10,000	15,870	12,453	
2013	1,301	1,165	90	882	76	13,500	12,000	17,512	14,422	
2012	1,439	1,329	92	945	71		13,000		15,426	
2011	1,291	1,093	85	976	89		11,500		14,092	
2010	1,064	888	83	763	86		10,000		11,549	
2009	1,071	1,000	93	857	86		11,000		13,803	
2008	1,255	1,183	94	1,003	85				13,935	

注1：農協シェアは農協取扱高÷北海道産出高、ホクレンシェアはホクレン取扱高÷農協取扱高で算出。
注2：2019年産の値は出回りから翌年10月までの相対取引数ウェイトで加重平均により算出、2020年産は、出回りから令和3年1月までの相対取引数ウェイトで加重平均により算出。

どこか協同組合をユートピア的に解釈しすぎていようような印象を受けてしまう。
生産者の意見が協同組織に強く反映されていることは、農水省の統計資料からも裏付けられる。表で示した生産者のJA利用率と、JAのホクレン利用率の相関関係だ。
一時期、JAのホクレン利用率が

大きく落ち込んでいたことがお分かりだろうか。12年から14年までの3年間だ。とくに12年は、前年より18ポイントも落としている。出荷先をホクレンから直接販売に切り替えたのだ。いかにも北海道の農協らしいなと思う。
次に生産者のJA利用率に注目していただきたい。10年に前年より10

ポイントも落ちた。これはホクレンや農協の販売に不満を抱いた生産者が、直接販売に切り替えた結果の数字だ。

その生産者の不満が、農協を通じてホクレンに届き、それを受けてホクレンがようやく重い腰を上げ、民間企業並みのマーケティングを始めた。マツコ・デラックスを起用したブランディング作戦も、その経緯の中から生まれてきたのであろう。

そうした努力の成果はすぐに出た。15年にはJAのホクレン利用率が9ポイントも上がったことだ。これにつれて生産者のJA利用率も再び90%台で安定してくる。農協組織の理想的な姿がここにある。

ホクレンが抱えた大量の在庫米。つまるところ相場を見誤って仕入れに失敗したことに尽きる。昨年12月時点の在庫は38・3万t、俵数にして612万俵。在庫を全量仕入れ原価で売却してもホクレンの経営はびくともしない。

損失はざっくり感で約80億円。運賃など流通経費で1俵1000円ちよつとの損失が出ると計算したからだ。その程度の損失なら、利益剰余金800億円の1割を削る程度の負担で処理できるはずだ。

それが道産米とホクレンのブランド価値を守る唯一の方法だ。